

問題・目的

Ames & Archer(1987, 1988)は、目標構造を2つに大別し、学習それ自体の習得を目標とするもので、努力に大きな価値がおかれるものを「熟達目標(mastery goal)」, 学習自体は手段で、他者との比較によってよい成績を上げることが目標とするもので、できるだけ努力しないで成功することに大きな価値がおかれるものを「遂行目標(performance goal)」と定義した。

教師は自らの目標構造をもとに指導行動を決定する。教師の指導行動について三隅・矢守(1989)は、中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動を学校教育の目標達成を志向した P 行動と学級集団の維持を志向した M 行動の2種類に分類し、PM 型の指導行動が生徒のスクールモラルに最も好ましい影響を与えることを示した。したがって本研究では、教師と生徒の目標の一致度に着目して目標構造と教師の指導行動の関連を調査する。

本研究の目的は、教師の指導行動の認知が学級連帯性、学習意欲、学力にどのような影響を及ぼすのかを、数学の授業における教師の目標構造と生徒の目標志向性が一致している場合としていない場合を比較し、検討することである。

- 仮説 1 生徒の Learning 目標志向性(熟達目標)の得点、一致度がともに高い場合は、教師の P 指導行動、M 指導行動をより認知し、学級連帯性、学習意欲、学力ともに高くなると考えられる。
- 仮説 2 Performance 目標志向性の得点、一致度がともに高い場合は、P 指導行動をより認知し、M 指導行動は認知しなくなる。また、学力が高くなると考えられる。
- 仮説 3 対人関係目標志向性の得点、一致度ともに高い場合は、教師の指導行動の M 指導行動の認知が高くなり、学級連帯性のみ高くなると考えられる。

方法

調査対象者 愛知県内の公立中学校の1~3年生234名(男子117名, 女子116名)と、その学級の数学担当教員5名(男性2名, 女性3名, 教師歴平均14.6年, $SD=9.02$)に調査を実施した。中学生は、欠損値の多かった1名(2年生女子)を除いた233名を分析に使用した。

調査時期 2013年7月から11月にかけて実施した。

調査内容

1. 中学生用質問紙の構成

(1) 生徒の目標志向性尺度(5件法, Table 1 参照) 「Learning 目標志向性」, 「Performance 目標志向性」, 「対人関係目標志向性」, 「回避目標志向性」の16項目を作成した。

(2) 教師の指導行動尺度(5件法, Table 2 参照) 森部(2013)の

Table 1 生徒の目標志向性尺度の因子分析結果(主因子法, プロマックス回転)

	I	II	III
I. 対人関係目標志向性 ($\alpha = .828$)			
at13 友達と楽しみながら数学の授業を受けたいと思う。	.918	-.056	-.026
at10 みんなと楽しく授業を受けたいと思う。	.904	-.096	.084
at7 クラスの人と一緒に数学の授業を受けたいと思う。	.667	-.036	.162
at8 授業中にだれか面白いことを言ってくれないかと思う。	.611	.127	-.412
at16 みんなと話し合いながら数学が分かるようになりたいと思う。	.460	.126	.102
II. Performance 目標志向性 ($\alpha = .776$)			
ap6 テストでいい点数を取りたいと思う。	.040	.740	.112
ap12 高校受験に合格したいと思う。	-.073	.690	-.135
ap1 友達よりもいい成績を取りたいと思う。	.024	.611	-.051
ap9 計算が速く解けるようになりたいと思う。	-.014	.598	.245
III. Learning 目標志向性 ($\alpha = .771$)			
al5 数学の勉強も努力をすることが大事だと思う。	-.036	-.181	.903
al2 答えを出すだけでなく、解き方を理解することが大事だと思う。	.011	.110	.575
al11 がんばって授業に取り組みたいと思う。	.099	.272	.530
al3 数学に興味を持ちたいと思う。	-.046	.190	.429
	因子間相関		
	I	-.290	.262
	II		.680
	III		-

教師のリーダーシップ行動尺度を参考に「P指導行動」, 「M指導行動」の11項目を作成した。

Table 2 教師の指導行動尺度の因子分析結果(主因子法, プロマックス回転)

	I	II
I. M指導行動 ($\alpha = .789$)		
dm13 数学の先生は, 数学の質問をするとわたしの知りたいことを答えてくれる。	.853	-.150
dm10 数学の先生は, わたしの意見を聞いてくれる。	.757	-.009
dm14 数学の先生は, わたしがどこでつまづいているかを分かってくれる。	.661	-.050
dm1 数学の先生は, 楽しい数学の授業をしてくれる。	.556	.057
dm7 数学の先生とは, 授業の時間以外にも話すことがある。	.470	.150
II. P指導行動 ($\alpha = .583$)		
dp6 数学の先生は, 問題が分からない時は自分で考えたり調べたりするように言う。	-.020	.688
dp8 数学の先生は, 数学の問題を自分で考えるように言う。	-.094	.560
dp2 数学の先生は, 提出物の期限を守るように言う。	.363	.403
dp3 数学の先生は, 授業のとき, わたしたちが勉強にとりかかるまでだまって待っている。	.042	.356
	因子間相関	
	I	-.231
	II	-

(3)教師の指示の正当性尺度(5 件法) 教師の指示の受け取り方を問う3項目を作成した。

(4)学級連帯性尺度(5 件法) 三隅ら(1989)の

スクールモラル項目の「学級連帯性の因子」を参考に, 学級の連帯性を問う4項目を作成した。

(5)学習意欲尺度(5 件法) 三隅ら(1989)のスクールモラル項目の「授業満足度・学習意欲の因子」を参考に, 数学に対する学習意欲を問う4項目を作成した。

(6)数学の学力尺度(7 件法) 学校での数学の授業の理解度を問う1項目を作成した。

2. 数学担当教員用質問紙の構成

(1)教師の目標構造尺度(5 件法) 生徒の目標志向性尺度と対応した「Learning 目標構造」「Performance 目標構造」「対人関係目標構造」「回避目標構造」の15項目を作成した。

(2)数学の授業形態について(自由記述) 学級ごとに分析結果に違いがあった場合の参考にするため, 数学の授業形態を自由記述で回答を求めた。

結果

Learning 目標が及ぼす影響

独立変数を Learning 目標志向性, Learning 目標一致度, 媒介変数を P 指導行動, M 指導行動, 従属変数を学級連帯性, 学習意欲, 学力とした重回帰分析を行った。その結果, 仮説とは異なり, 教師と生徒の目標が一致していなくても, Learning 目標志向性が高いことが M 指導行動の認知及び学級連帯性, 学習意欲, 学力を高めることが示された。

Performance 目標が及ぼす影響

独立変数を Performance 目標志向性, Performance 目標一致度, 媒介変数を P 指導行動, M 指導行動, 従属変数を学級連帯性, 学習意欲, 学力とした重回帰分析を行った。その結果, 仮説とは異なり Performance 目標志向性そのものが高いことが M 指導行動を介して学級連帯性, 学習意欲, 学力に影響することが示された。

対人関係目標が及ぼす影響

独立変数を対人関係目標志向性, 対人関係目標一致度, 媒介変数を P 指導行動, M 指導行動, 従属変数を学級連帯性, 学習意欲, 学力とした重回帰分析を行った。その結果, 仮説を一部分支持し, 対人関係目標志向性, 対人関係目標一致度がともに高いとき, M 指導行動を介して, 学級連帯性, 学習意欲, 学力を高めることが示された。一方, 学習意欲, 学力においては, M 指導行動を認知しない場合, 対人関係目標志向性が学習意欲, 学力に負の影響を及ぼすことも示された。

課題目標と対人関係目標が及ぼす影響の比較

Learning 目標志向性と Performance 目標志向性はともに学習課題内容に対する目標であり, 類似して

いると考えられるため、2つの目標志向性をあわせて、数学の学習課題そのものを理解し成績を上げることが重視する「課題目標志向性」を新たに作成した。

独立変数を課題目標志向性、課題目標一致度、対人関係目標志向性、対人関係目標一致度、媒介変数をP指導行動、M指導行動、従属変数を学級連帯性、学習意欲、学力とした重回帰分析を行った(Figure 1)。その結果、課題目標志向性が高いとき、M指導行動をより認知し、学級連帯性、学習意欲、学力がともに高くなることが示された。また、課題目標志向性、対人関係目標志向性ともにM指導行動を通して、学級連帯性、学習意欲、学力が高くなる結果となった。しかし、M指導行動を介さない場合、課題目標志向性が高ければ学習意欲、学力が高くなるが、対人関係目標志向性が高ければ学習意欲、学力は低くなることが示された。さらに、対人関係目標一致度が高ければM指導行動の認知が高くなるが、課題目標一致度とM指導行動の認知とは関連がみられなかった。

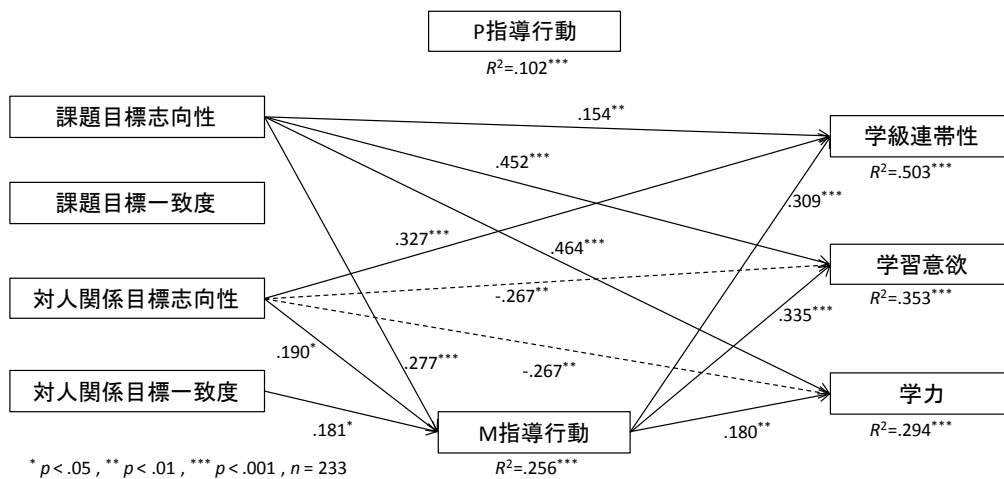


Figure1 課題目標、対人関係目標に関する重回帰分析

考察

学習内容に関する Learning 目標志向性、Performance 目標志向性、課題目標志向性は、M 指導行動を介して、かつ、直接に学級連帯性に正の影響を与えることが示された。Learning 目標志向性が高い生徒は友人と協力して学習するという意味での学級連帯性、Performance 目標志向性が高い生徒は友人と競争して学習を行うという意味での学級連帯性が高まると推察されるため、学習内容に関する目標を持つ生徒は目標の内容に関わらず学級連帯性が高くなったと考えられる。

また、対人関係目標志向性は、M 指導行動を介して、また、直接に学級連帯性に正の影響を与えることが示された。対人関係目標志向性が高い生徒は、M 指導行動を対人関係づくりの行動だと解釈するため、M 指導行動をより認知することで、自らの対人関係目標を達成させようとするのではないかと推察される。また、教師も対人関係の向上を重視している場合、生徒同士の交流を理解、促進しようとするため、M 指導行動が増加し、学級連帯性が高まると考えられる。

さらに、学習内容に関する Learning 目標志向性、Performance 目標志向性、課題目標志向性は、M 指導行動を介して、かつ、直接に学習意欲、学力に正の影響を与えることが示された。学習内容をより理解したり成績をあげたりすることを目標としている生徒にとって、生徒の理解度を確認し促進させる働きがある M 指導行動をより認知することで自らの目標に近づくことができると判断すると推察される。M 指導行動を認知すれば、学習内容の理解や成績を向上させるための学習方法が明確になるため、学習意欲、学力が高まると考えられる。

一方、対人関係目標志向性は、直接には学習意欲、学力に負の影響を及ぼすが、M 指導行動を介することで学習意欲、学級連帯性に正の影響を及ぼすことが示された。教師との関係づくりよりも友人との仲を深めようとする、学習意欲が低いほうが友人と交流しやすかったり、勉強する時間を友人との話題づくりのための時間に使用したりするため、友人との交流が勉強を阻害し、学習意欲や学力が低下すると推察される。しかし、M 指導行動を認知することで、教師が提案する学習活動を通じた友人との交流の方法を認知し、友人との交流と学習活動との両立が可能になるため、学習意欲、学力が高くなったと推測される。

P 指導行動はどの目標志向性、一致度からも影響を受けず、学級連帯性、学習意欲、学力にも影響を与えないことが示された。本研究で調査した P 指導行動は、自主的に学習する態度を養うことと、生徒同士の学びあいを目的とした指導行動である。そのため、P 指導行動を認知することは生徒自身の目標達成と関係がないと判断したと推測される。また、P 指導行動を認知した生徒は、他の生徒にも学びあいの活動や自主的な学習をするよう促す行動が増えると想定される。しかし、生徒同士の学びあいを生徒自身が促進しても、効果のない方法で学びあいを実施する、学びあいが長期的に続かず学習意欲や学力の向上に影響を及ぼさない、という可能性が考えられるため、学級連帯性、学習意欲や学力には影響を及ぼさなかったと考えられる。

学習内容に関する目標の一致度は指導行動に影響を及ぼさなかったが、対人関係目標一致度は M 指導行動に正の影響を及ぼした。教師は学級全体の様子から目標を調節していることや、個別に指導する場合にはその生徒に合わせた目標を持って指導を行っていることが考えられる。そのため、課題目標一致度が高くなくても生徒は自らの課題目標の達成のために M 指導行動をより認知している可能性がある。一方、対人関係目標一致度が高い生徒は、自らの対人関係目標を達成させようと教師や友人との関係づくりを支援する行動として M 指導行動を判断するため、より認知すると考えられる。

今後の課題

今後の課題として、3つの点があげられる。はじめに、校種や教科によって、Learning 目標志向性と Performance 目標志向性の特徴や及ぼす影響が異なる可能性がある。そのため、校種や教科を考慮した目標を考えることや、その違いについて検討する必要がある。

次に、学級全体に対する教師の目標を測定するのみでは、生徒との目標一致度を正確に測定できないと推察されるため、教師が生徒1人1人に対して目標や求めることが異なるのかどうか、また、その測定方法やその目標が生徒に与える影響を検討する必要がある。

最後に、自主的な学習活動を促す以外の P 指導行動も検討し、同じ P 指導行動でも生徒に異なった影響を与える可能性があるため、様々な P 指導行動について目標志向性との関連を検討する必要がある。

引用文献

- Ames, C., & Archer, J. (1987). Mother's beliefs about the role of ability and effort in school learning. *Journal of Educational Psychology*, **79**, 409-414.
- Ames, C., & Archer, J. (1988). Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, **80**, 260-267.
- 三隅二不二・矢守克也 (1989). 中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性に関する研究 教育心理学研究, **37**, 46-54.
- 森部真穂 (2013). 教師のリーダーシップが学級の児童・生徒のリーダーシップに及ぼす影響 愛知教育大学平成 24 年度卒業論文